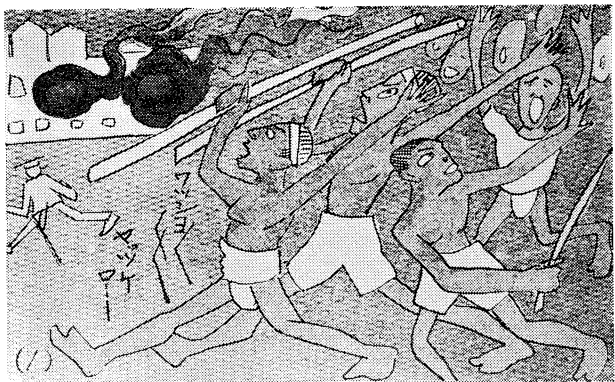


# 私の見て来た米騒動

芦谷増吉

回顧すれば米の問題は実に困難そのものであったし、現在未だ統制の残っているのも亦米である。彼の国運を賭した日露戦争の二ヶ年間は、幸に概して好収穫を得た由で、その

大正七年米騒動の後に  
風刺絵はがき(5枚の内)



後第一次世界大戦勃発の頃は、豊作尻を承けて米価が下落した為、救済方法として内地米の海外輸出が行なわれた。即ち北歐、ウラジオストック、米国等へ仕向けた。大体白米一升一錢乃至十六錢、麦は七、八錢がらみであったと云う。

然るに好況に伴い米の消費量が増加して、一年一年当り米のみで一石二斗となつて来た。折悪しく前年の米作不況を承け、且つ他物価との釣合上、大正七年に入り今度は外国米の輸入によつて、高米価の調節をせねばならなくなつた。私は当時鈴木商店本店の米穀部に在つてこの仕事をした。主任は永井幸太郎さん、係長は松下豊吉さん、又の名を「米の虫」と申す権威者だ。政府は農商務省に臨時外米監理部を設け、事務系統は後年東京株式取引所の理事長となり、あの帝人事件で起訴された河合良成氏、技術系統は後年横浜の鈴辯殺し(パットで撲殺シトランク詰にして信濃川へ投入した)で有名な

なつた山田憲氏、この二人が牛耳つており、私もいろ／＼厄介かけた。

河合氏は官吏と申すより商人肌であり、山田氏は実に職務に熱心でビルマ方面に出掛け、自ら米作をやつてみたりした人だった。序ながらこの頃東京駅の皇居寄りには、東京海上ビルのみが聳え、長崎英造氏が鈴木商店事務部長でここに居た。政府は臨時外米監理部を実施し、三井物産、鈴木商店、岩井商店(今の岩井産業前身)湯浅貿易の四商社を指定してラングーン、サイゴン、パトナそれにカルフォルニア米等の手持米を先づ買上げ、次いで輸入措置を執らした。そして何れも政府の指令で、地方事情に応じて販売させたので、全く各自の自由な買入売捌が出来なかつたのであるが、世間では之を知る者少く、何だか指定商が買占め売惜みしたかに誤解していたらしい。

かかる間に大正七年七月末米価は高くなり、遂に東京の在米は市民一週間の消費を支えられぬこととなつた。ここに於いて政府は更に鈴木商店をして朝鮮米二十万石を、極めて秘密裡に買入れ、之を事態急迫せる東京へ廻送命令を出し、鈴木は自ら買取ることの不可を思つて、大阪の

小西という朝鮮米專業者へ委託し、大阪港から湊町駅へ、そして東京へと廻送したのである。

「パイのパイのパイ」こんな流行歌の出来た時代とて、八月上旬米価は白米で一升五十五錢位にハネ上つたと思う。偶々富山県の漁村から示威運動が持上り之が動機で各地に米騒動が発生し、就中A新聞が最もアジッタもので、私共はAを「黄色紙」(Yellow Paper)と呼んだ。神戸へ伝波して八月十二日夕頃、新開地の大群衆の一隊は兵庫方面の米屋、米倉庫を襲ひ、他の一隊は貸金、貸家業をしていた兵神館(楠町に在つたと思う)を破壊し、主力は楠公前から東川崎町、今の三越の西南向角の鈴木商店へ殺到した。清野兵庫県知事は穩便主義だったので、警戒線は忽ち突破せられ、屋内に侵入して直に放火した。三越の位置に在つた神戸新聞社も焼打された。ここに於いて姫路歩兵第三十九聯隊から出兵して、ヤット鎮静を取戻すに数日を要した次第であつた。

米騒動は八月下旬まで約一ヶ月間つづいた。暴動の烽起地域は廿四府県、百三市町村に及び、軍隊の出動を見た所が四十二ヶ所である。丁度この頃シベリヤ派兵が行なはれてい

## ★原稿募集

内容 随想、詩、俳句、絵、写真等  
用紙 原稿用紙四百字詰四枚程度  
締切り 次号(第四号)  
送先 昭和四十年八月三十日  
神戸市生田区三宮町一丁目  
四三 三神ビル内  
太陽鋳工KK分室 柳田宛

## ★編集室より

「春は焼痕に入って青し」と云う句がある。野焼をした跡の早春の情景であるが野焼の跡でなくとも草はもうそこそこに芽を出し始めている。

かよわく見えて草の強さを年ごとに感じさせられる。辰巳会員も夫れに似てすくすくと「木欣欣」ともって榮に向う」と申上げる。諸兄からペンを馳らせて頂く原稿は將に百花爛漫のうるおいにも優るものと感謝せずにはおれない。新春の授賞の祝宴、四月の例会何れも皆元氣一ぱい、其の喜びは今更駄弁の限りではなからう。

本年度の抱負もさることながら一層の御自愛特に交通禍から護りつづけて下さるよう祈つて止まない。

## 山の思い出

岡本志良

た。之で教えられるのは、世の中には盲人も千人いる」と云うことで、或る程度宣伝の必要もある所以だ。

遷り、太平洋戦争、そして敗戦後の食糧不足、農村の尺祝、相続法の改正と農業の零細化、農地開放と地主層の没落、今尚統制の賛否論などは皆さんの熟知するところである。

爾来米作の良否は常に悩みの種となり、昭和十年頃の農業の疲弊したことは既に別記の通りであり、支那事変から昭和十五年に米の配給制に

(元神戸銀行主計課長・当時米部の担当者の一であった)の担当者の一人であつた)朝出勤前に、できなければ夕方店が退けてから登らないと追つかなくなつた。

一、神戸を第二の故郷と考えていたのは、解散後長期間続いた。それは神戸の持つ都会的魅力と山があつたからである。登山会(黎明会)のお世話をした関係もあつて色々な思い出があるが、再度山はその随一である。戦後昔の思いでよ、今一度と当時の道から登つてみたが沿道と云い善助茶屋といひ昔の面影は少なくなつて上、ドライブウエーがあつてその変り方に驚いた。茶屋のおばさんとしは昔を語り、なつかしんだものである。

苦勞の甲斐あつて三〇三回で金メダルをもらった(たしか二番目か三番目であつた)純金一匁のメダルは重くかやいて貴重なものであつた。それが間もなく中山手の寮の押入からケースだけ残してなくなつていた。不注意とは云いながら今でもおしくて仕様がなない。

二、再度山に一年に百回、二百回三百回登れば各々銅、銀、金の記念メダルが出た。又店の好意で豆コーヒーが飲めた。一年三百回は仲々骨の折れるもので、雨の日も雪の日も

三、苦しかった思出に淡路島ゆきがある。何年だったか覚えていないが一行三四十名で汽船にのつて淡路島の洲本に上陸し先山に登つて下山してみた天候が悪く欠航とのこと時間を過ぎていくし明日からの出動を考えるとこのままで居られない。

意を決して淡路島を縦断して明石の対岸まで強行徒歩することにした。海岸線に沿つた道は岬を曲れば更に遠く次の岬が見えて仲々はかどらな。落伍者には牛車を頼んだりして日がとつぷり暮れた夜になって明石の対岸に着き、無理に漁船を頼み無事神戸に帰ることができた。漁船は波に大きくゆれたがみんな死んだように眠り明石港に入つて静かになつた港の赤い灯標を今でも目に浮べることが出来る。参加者一同が登山会の名誉にかけてよく協力して頂いたことを感謝している。

四、登山会の大きな行事は食堂に墨で大きく書いて張出したものであるが、誤字があつて赤面したり、正月の休みに山陰の大山へ雪中登山を試み、一行三名のうち二人までチブスにかかり、一人が死亡し私は生死をさまよう何日かの後奇蹟的に助かり今なお生きている悲しい思出、その節上役や同僚に大へんな御迷惑と御心配をかけた申訳なきなどこの間のことのように思い出される。

追憶には進歩がないと云われるがまだまだ生きながら活躍しなければならぬ我々にとつて、苦しさを忘れ楽しさのみがよみがえる思出も亦心の糧として楽しからずやである。会員諸兄の御健康をお祈りします。(フタバ産業KK)